



TITLE:

<批評・紹介> 梅原末治著 「戦國式
銅器の研究」

AUTHOR(S):

小野, 勝年

CITATION:

小野, 勝年. <批評・紹介> 梅原末治著 「戦國式銅器の研究」. 東洋史研究 1936, 1(6): 561-567

ISSUE DATE:

1936-08-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/138714>

RIGHT:

批評・紹介

戰國式銅器の研究

梅 原 末 治 著

昭和十一年 月、東方文化學院京都研究所發行
菊倍判、定價拾五圓

一九二三年、一農夫の偶然な發見を端緒として多數の古銅器が發掘されたことから、山西省大同府に近い渾源の李峪村と云ふ寒村が一躍東洋學者の間に名を知られるに至つた。この古銅器群は舊來殆ど注意にのぼらなかつた様式を帶びて居り、加之、古物商の巧な宣傳及び爾後の同式遺品の増加に伴ひ、秦式銅器の名稱のもとに漸次廣く視聽をあつめるやうになつたものである。

こゝに紹介しようとする梅原助教の近著「戰國式銅器の研究」は考古學の見地から、この李峪村出土の一括遺物を研究され、それを出發點として廣く同式の古銅器に及び、その性質を攷へ、年代を論じ、呼稱の改むべきを説き、進んでそれが持つ意味を究明せられたものである。

今その内容を見るに、先づ李峪村に於ける遺物の發見を語り、その種類に就いて詳細な記述を試みて居る。即ち此處で發見されたものは單に銅製品のみにとゞまらず漆器、土器、玉・玻璃・骨の製品、子安貝等をも含んで居るのである。然し主要のものは勿論銅製品であつて、鼎、甑、鬲、罍、尊、卣、壺、敦、豆、匱、盤、盃等の所謂禮樂の器に屬するものゝ外、若干の銅劍、銅戈、車軸頭の類が數へられる。これ等の銅器の通性を概観するならば、器の作りが薄手であり、形は丸味を帶びて優美である。器に附した文様を見るに殆ど全面に亘つてほどとしたものがあり、平面的な蟠螭文を初め、畫象文紐狀文等がほどこされて居る。又飾りとしては寫實的な鳥獸がつけられて居る點も亦注意すべきであらう。猶、盤の如く魚鼈禽獸等の裝飾文が印せられて居るもの、鬲の如く素文であつて獸鬚のみの加へられて居るものもある。これ等は型を用ひて圖形を繰返して居る點が尤も特徴であるが、象嵌や錯文等新しい手法の行はれて居ることも看過してはならぬ。

偕て、上述の特性を示す器を支那古銅器中に求めるならば李峪村の出土品のみに限られるものではない。この

様式の類例に入るものは東西の博物館や個人の蒐藏品中に幾多の類例を擧げることが出来る。而もこの中に於て近年出土の遺物にはその出土地點の明確なものが多い。

これ等は今日未だ遺跡の學術的な調査の充分でない爲に猶 regional Fund の範圍を出ないものではあるとしても形式上の通性に加ふるに年代の推定その他の考察の據所を與へるのである。即ち瑞典のカールベック氏の蒐集した淮河流域出土品、河南新鄭縣の古墳出土品、或は洛陽金村の古墳出土品、又は河南輝縣の出土品及び安徽省壽縣の出土品等がそれであつて、これ等には記銘自體なり出土品なりが文獻に徵すべきものゝ存する點で、年代觀に寄與するところが多いのである。例へば、王子嬰の爐〔新鄭出土〕、厲氏編鐘〔金村出土〕、嗣子壺〔同上〕等の如き、或は壽州出土の鼎・簋・豆・盤・壺等が各々有銘であるが如きである。殊に壽州出土品は昔の楚の國と關係のあることが明かにされると共に、この地は秦に滅亡されるまで約二十年間楚の都であつたことが記録に見え、從つてその年代を推すに役立つ。又金村の古墳は總數八ヶ所で、その間には固より時代に前後があり秦代の遺品とすべきものをも含んでは居るが、有銘の古銅器は戰國

時代の韓のものとなつて解せられる。この外同様式中、有銘の器であつて記録に徵して年代を推求することの出来るものはこれを戰國時代に比定する所見を妥當とすべきである。

偕て、以上は同様式銅器の概觀であるが、これを支那古銅の全體から考察するならば、短期間に於ける所産とし、或は様式を固定したものとして解すことは誤りである。形態に就いて見るならば、實際的な形をとり、作りが薄手であること、或は獸銜環を附し、圈足・獸脚を有し、有蓋のものゝ多いことなどが注意される。裝飾圖文の方面を考へるならば平面的なものと立體的なものとの二種が注意される。後者に於ては禽獸の形を飾りとして附した場合がそれであり、前者に於ては地文的に器の全面に文様を附した場合がそれである。尤も殆ど素文のものも行はれ、而もこれがこの様式の一特色として忘却すべからざるものではあるが平面的な文様中最も盛に用ひられて居るのは蟠螭文である。この他子安貝文細文があり、或は著しく寫實風な魚鼈鳥獸文があり、殊に注意すべき圖文として、狩獵の有様などを表はして居る畫象的文様がある。手法に就いて見るならば文様に於

ける型の繰返しと透文、線文、嵌石、金・銀・銅等の錯文が挙げられる。思ふに、所謂秦式銅器と呼んで居るこれ等の銅器をば以上の通性に基いて、嚴肅奇古な形態を有し奇怪な動物文、雲文などを飾つた殷周の銅器——これは禮樂の器として呼ばれて居る——と輕快な形と裝飾の少ない、薄手の作りを持つた漢代の器——これは服御の器と呼ばれて居る——とに比較するならば全く中間的形式を持つて居ることが知られるのである。器の種類を比較して見ると殷周の器に於て盛であつた角・爵・罍などが姿を沒して、簠・簋の如きを増して居る。又實用的な器の數を加へて居る點では漢代の器に先行することが認められる。猶この前樣式に比して銘文のある器の少くなつたことも看過してはならぬ。

このことにより、この種の銅器が二大樣式の中間樣式を占めるものであることが明白であるが、これが過渡的系統のものであるとしても、二大樣式と對立すべき新樣式である點も亦觀察の結果明かにされる。偕てかくの如き新樣式の銅器は何時頃製作されたものであらうか。先づその年代を定めるに當つてはこの種のものが漢代文物の先行樣式であること、後者は樂浪發掘の結果年代觀

は明確であることである。次に新樣式の發掘地を攷へるに山西の李峪村、河北の易州淮河流域特に壽州及び洛陽の金村等とその歴史地理から推して悉く戰國時代に深き關係を有し、遺物の語るところ戰國時代に屬すると定めて全く誤りがない。果して然らば舊來この式の遺品を以つて秦式と呼び、或は秦楚式と稱し、周末漢初(式)の名を附するは不適當であり、又出土地の名を以つてこの樣式に冠せんとする淮河式の如きも、時代的名稱を用ふる統一した呼稱法からは同じく排せらるべきものであつて何れも戰國樣式の命名の當れるに如かぬ。

以上は考古學的立場より、「戰國式銅器とは何ぞや」の問ひに對して客觀的な説明を加へたものであるが、然らば次に如何にして戰國式銅器は生じたるか、即ちその内面な考察が問題となる。

偕て、戰國式銅器は非實際的な殷周銅器から發展して輕快な器形を持つ様になつたものであるが、かゝる樣式展開に際して新要素となつたものは先づ外來文化の影響であつたことを考慮せねばならぬ。此處に於て、圖文上畫象文、或は馴鹿の形、又は禽獸の形の絡んだモチーフは先づ廣義のスキタイ文物との類似を注目せしめるであ

らう。これを具體的な例に徴するならば高加索のコーバン地方の初期鐵器時代の遺物があげられるのである。而してこれ等遺物の年代は紀元前五六世紀とする説が近時有力であるが、それは又戰國式銅器と時代の上に於ても近接することを示して居る。

果して然らば戰國式銅器の出現はその一要因としてスキタイ文物の影響を認めねばならないのである。然し單に外來文物の刺戟のみを以つてそのすべてを解釋すべきではない。即ち外來文化が民衆に影響を與へ、その或る要素が攝取されたには相違ないが、戰國式銅器自體は支那固有の文化の上に立つて自らの系統を發展せしめた支那古銅器の一様式を占めるものであつて、何處までも獨自の位置を持つて居るものであるある點を看過してはならないのである。

以上がその内容の概略である。私は郭沫若氏が金文の研究から出發し、それに基いて立てた古銅器の一般的考察にかなりの興味を覺えた矢先であつたので、今度梅原先生がより廣範な考古學的立場に於て如何なる結果を得られたかに就いて同等或はそれ以上の興味を覺えた。

由來、遺物の客觀的性質を究明叙述することは先生の

最も得意とせられるところである。先生は支那考古學に於て要求さるべき現下の問題は「それが如何なる意味を持つか」と云ふことにあるのではなく、「それが如何なるものである」と云ふことにあるとされて居る。従つて本書には遺憾なしと云ふ程度まで記述主義を徹底せしめ、日頃の持論を實踐して居られる。

要するに新たに戰國式と命名された銅器は已に秦式銅器その他の呼稱を以つて學界に論ぜられて居るものであるから、その特性に就いても不充分とはいへ種々語られて居る。だから本書はその悉くが未踏の新見解のみであると云ふ譯には行かぬと思ふが、これを廣く綜合し、精しく分析して記述した點は恐らく何人も追隨を許さぬところと思ふ。

偕て、終りに若干の感想を述べるならば實年代の限定と呼稱の意味に就いてある。

先生は河南新鄭縣古墳出土の一長方形の容器（王子嬰廬）の銘文の解釋に關する諸家の説を擧げて「比定の年代は孰れも前六七世紀の間にあつて、それは古銅器の銘辭の書體の變遷の示す所や、上來述べた伴出の銅器の様式とも相應する所があるから大體の年代は固より其の頃

と認めてよいであらう。たゞ右の想定から直ちに戰國樣式に春秋〔時〕代をも含ませる見方を取る者があるとすれば早計に過ぎたと云はねばならぬ。それは戰國式銅器自體の明確な把握を缺くに基くもので新鄭縣遺物に見る同似是他方古調を帯びた別個の器の伴出と共に、三代の尊彝から同式への推移を示すものとして、其の始源の考察に寄與する資料に外ならぬ」〔頁六〇—六一〕と述べて居られる。

これによると新鄭出土の王子嬰爐は紀元前六七世紀のものであること。——諸家の比定はB.C. 700 前後に屬し、いづれにせよ春秋初期に當る——但しこの器は古調を帯びた別個の器と伴出して居ること、従つてこれは三代尊彝から戰國式への推移の形式であること。故に戰國式は春秋時代を含まぬことの四項があげられて居る。然らば私は以下のやうな點を注意しなければならぬ。即ち王子嬰爐が蟠蛇紋簠を含む一括遺物であることを。果して然らば蟠蛇紋簠の年代を亦その頃と考へて差支へはあるまい。而も「此の器では形が既記シカゴ美術館藏の簠(圖版五)に酷似するのみならず、圖文また相似た細かな蟠蛇文で、其の型による繰返しであることも容易に推され

る」〔頁一五九〕と書いてある。念の爲圖版五〇を見ると戰國式銅器・簠と明確に題されて居る。果して然らば新鄭出土蟠蛇文簠は先生の所謂戰國式銅器であつて、而もその年代は春秋初期と認めて差支はないであらう。この出土が三代風彝器と伴出して居ると居ないとは問題は自ら別ではあるまいか。——王子嬰爐は郭氏の圖録によると秦式に屬すかに見える——

先生は戰國式銅器が周漢二大樣式の中間に位するものであり、更に歩を進めて幾多の例證から、この「樣式の行はれた時代の一點を戰國時代であり」とされて居る。これは傾聽せねばならぬ說である。然し、それだからと云つて戰國時代にあると云ふことは春秋時代にないと云ふ理由にはならないのではあるまいか。彼の金村出土の厲氏鐘の年代觀に就いての見解、即ち周の靈王の二十二年(550 B.C.)と安王の二十二年(380 B.C.)の二說中、先生は後者を取つて居られる〔頁六三〕が、一體考古學的立場から安王即ち戰國の初期と春秋の末期にどれ程の相違があるであらうか。

先生は又、「一部論者の説くが如き、器の樣式を殆ど考慮することなく、或銘文に時代の遡る様に考へられるも

のがあるとする自家の見解から、直ちに本様式が春秋時代にも行はれたと斷するが如きは今の場合、吾々の採らない所である」と述べて居られる。この非難は専ら郭若沐氏に投ぜられたものゝ様に推測されるが、聊か酷に過ぎはしまいかと思はれないでもない。氏の立場は金文解讀から出發したもので、固より考古學的ではない。然し、その述べるところを聽くに、氏の兩周金文辭大系圖錄の序文に於て、「余の方法は先づ銘辭史實が自らその年代を述べるに任せ、年代が既に明らかになると、その形制と紋繪が自然に條貫を示してきたからである。形制と紋繪がこの様な變化を示して居る一方、銘辭の文章と字體も同じ様な變化の迹を辿つて居る」(田中氏譯)として、支那青銅器の時代區分を行ひ、濫觴期、勃古期、開放期、新式期の四に分けて居る。最後の新式期と云ふのが所謂戰國式銅器製作の年代に對應するものと解せられ、實年代を春秋の中葉から戰國の末期にあてゝ居る。

偕て、こゝに別な「秦式銅器」の年代觀を紹介するならば水野・江上兩氏の所見が擧げられる。即ち兩氏は秦式青銅器文化の年代を「西紀前五百年頃から、前二百年頃、降つても前百年までの時期である」(内蒙古・長城地

帶頁二〇一)とされて居る。兩氏比定の根據は奈邊に存するか不明であるので、その點甚だ遺憾であるけれども上限年代は郭氏の見解と殆ど一致して居ることが注意にのぼる。

かく考へ、改めて戰國式銅器の年代觀の根據を検討するに所詮、銘辭の解釋と記錄的徵證以外には、漢様式に先行し、周式に後續する様式であると云ふこと及びスキタイ文化の東漸と云ふ様なことが推し得るのみで、別に層位などの事實がある譯ではない。そうだとすると「戰國式銅器」と云ふ名稱も決定的な呼稱として採用し得らるべきものか否か問題もあらう。然し、これを舊來の呼稱、そのうち最も行はれて居る「秦式」銅器に比較すると遙かに適宜なものであるとは云ひ得る。何故ならば由來「秦式」なる名稱は考古學者が「我々の概念では周漢兩様式の間形式の意味に於てある」と注意を怠らぬにも拘はらず、屢々門外漢をして「秦式のもの」即ち短い始皇時代のものとして誤認せしめ勝ちであるからである。

偕て、今後吾々が「戰國式」の呼稱を使用するとならば、主唱者たる先生に次の様なことを容認して戴かなければならぬ。即ち少くとも年代觀の上には若干の餘

裕を置くことを。

彼の金文學者の研究と云ふものゝ各々の異見が斷えぬやうでは全くたよりないものである。然し他面から見た場合その不一致にも拘はらず大局に於てはそれ程違はない様にも思はれる。戰國式銅器の銘文の解釋の如きも殆ど春秋戰國に收ると云ふ點は認めずばなるまい。かゝることはその不充分を責める前に、或は殷代に或は西周に遡らなかつた點の方をかつてやつても宜いと思ふ。

以上、梅原助教授の著「戰國式銅器の研究」に對する紹介と批評を試みた積りである。理解の不充分から至らぬ點があり、却つて非禮にわたるところなきを保し得ぬ。その點は改めて先生の宥恕を庶幾ふ次第である。

猶、本書には森鹿三學士の「李峪村について」と題する論文がある。これは李峪村の歴史地理的位置を明かにせられ、更に、その出土品と秦の始皇とを結ぶ考への文獻的には根據を持たないことを論じ、寧ろ戰國時代の趙の武靈王と結ぶ可能性を説いた好論文である。ついでに代や中山のことに及んで戴けたら猶、彩を増したであらう。これは望む方が厚かましすぎるかも知れないが、

(小 野 勝 年)